

2023.10.1 発行

Little Tern Project

こあじさし

koajisashi

NPO法人

リトルターン・プロジェクト通信

◆このプロジェクトは東京都下水道局と大田区の協力を得ています。



あの頃はくわえきれないほど魚がいたもんなあ

Contents

- ◇ 2023年「NPO法人リトルターン・プロジェクト講演会のお知らせ」・・・1
- ◇ 「関東のコアジサシ営業地を巡る」荒牧哲・・・2・3
- ◇ 2023年コアジサシ観察会報告 比戸二郎・・・3
- ◇ 何もわかっていない鳥のこと 第12回「キアシシギ」蓮尾純子・表紙の言葉 岩本久則・・・4

2023年 NPO 法人 リトルターン・プロジェクト講演会のお知らせ

- ◆日時：2023年12月2日（土）
- ◆参加無料
- ◆開催場所：大田区民ホール・アプリコ 展示ホール（BF1）
- ◆2時開会・1時半開場（予定）
- ◆今シーズンの整備作業、営巣結果などの報告。
- ◆特別講演
「中学校の授業から始まったコアジサシのデコイ作り」
内山春雄氏（日本バードカービング協会 会長）
＜問い合わせ先＞
大田区環境清掃部
環境対策環境推進担当
☎03-5744-1365



自作のバードカービング
オグロヅルと内山春雄氏

講演会タイトルと講演要旨

「中学校の授業から始まったコアジサシのデコイ作り」

2000年、千葉県我孫子市立湖北中学校でコアジサシのデコイ作り教室を開始しました。鳥を彫るだけではなく、環境保護の学習が出来るようにコアジサシのデコイ作りを指導しました。

千葉市の鳥でもあるコアジサシのデコイを作りながら、この鳥が年々数を減らし続けている原因や、保護の方法も生徒たちと考えてきました。

出来上がったデコイは、大田区での保護活動のためにNPO法人リトルターン・プロジェクトに貸し出されています。

我孫子市立我孫子中学校でも2003年から2010年まで毎年続け、8年間で約4000体のコアジサシのデコイが作られました。

その中の800体は東京都大田区にある森ヶ崎水再生センターの屋上で保護活動に役立っています。

2013年我孫子市立久寺家中学校でもデコイ作りが始まりました。コアジサシのデコイは陶器で出来たものや樹脂製の物もありますが、時間をかけて木から削り出し、彩色して作っています。

コアジサシのデコイ作りもコアジサシの保護活動もやさしさが必要だと思っからです。

内山春雄氏 略歴

1950年、岐阜県生まれ

◆木象嵌師として（雅号・楽堂）

1978年労働省認定「箱根細工木象嵌技能士」資格取得。

2007年【楽堂象嵌】が千葉県指定伝統的工芸品に認定される。

◆野鳥彫刻家として

1980年日本鳥類保護連盟とバードカービングを始め。

1995年米国ウォード財団国際コンテスト、審査員をつとめる。

2006年厚生労働省より「卓越技能章」授与。「現代の名工」に認定される。

2007年「我孫子市文化スポーツ栄誉章」受章。

2007年野生生物保護功労者表彰「環境大臣賞」受賞。

2011年米国内務省、ミッドウェー国立野生生物保護区管理官より感謝状授与。

2018年日本鳥類保護連盟から「総裁賞」受賞

関東のコアジサシ営巣地を巡る

過去に営巣実績がある関東地方の飛来地を今シーズンは複数回、訪ねました。
今年、コアジサシの交尾・営巣・育児などが撮影できた一部を掲載します。

撮影・文：荒牧 哲 (LTP)



©Satoshi Aramaki

バトル - 多摩川中流 -



©Satoshi Aramaki

求愛給餌 - 多摩川中流 -



©Satoshi Aramaki

交尾 - 多摩川中流 -



©Satoshi Aramaki

プレゼントを運ぶ - 九十九里海岸 -



©Satoshi Aramaki

生まれたて - 九十九里海岸 -



©Satoshi Aramaki

狩り - 小田原酒匂川 -

多摩川中流では6月の台風2号の後も30羽超が堰にいたることもありましたが、嵩上げされた中州で営巣せず、6月下旬にはいなくなりました。小田原酒匂川の中州では、100羽近くが営巣しましたが、台風2号の大雨で中州が水没。コアジサシがいなくなりました。鹿島灘海岸、九十九里海岸の営巣地(主に計4か所)へは台風2号の後に通いました。台風2号の影響があったと思われるが、飛べる幼鳥がいる一方で、抱卵中や、巣からやっと離れた、など様々な成長段階の親子がおりました。渡りに向け、幼鳥に必要な体力と技能を身につけさせるべく、餌で誘導したり、叱咤する親の姿がありました。なお営巣に影響を与えないよう、高画素カメラと超望遠レンズを使い、遠くから撮影しています。



©Satoshi Aramaki

羽ばたき練習 - 千葉検見川の浜-



©Satoshi Aramaki

まず、足腰を鍛える - 鹿島灘海岸-



©Satoshi Aramaki

渡りに必要な体力と技能をみがく - 千葉検見川の浜-



©Satoshi Aramaki

巣を離れての育児始まる - 九十九里海岸-



©Satoshi Aramaki

飛べるようになると、水辺に出て餌を待つ - 九十九里海岸-



©Satoshi Aramaki

幼鳥の編隊飛行、兄弟か - 九十九里海岸-

2023年 コアジサシ 観察会報告



雨のなかでコアジサシを探す参加者 写真/荒牧 哲

今年の観察会は、2回とも70名以上の申し込みがあり、相変わらずの人気でした。しかし残念ながら、コアジサシの営巣は見られず、シロチドリ・コチドリのわずかな営巣と、送風機棟の軒先のイワツバメの雛を見ることができました。

特に7月1日は、前日17時の天気予報が9時頃からは小雨の予報だったので、予定通り開催することになりましたが、当日は予報が外れ、10時頃からは、結構な雨量となりました。

最近では受付テント・机は設置せずに、センター入口で参加費の集金と資料を手渡しましたが、雨に濡れて資料を渡すのが心苦しい状態になってしまいました。今後は事前に資料を透明な袋に入れる等の工夫をしたいと思います。

比戸二郎



何もわかっていない鳥のこと

第12回「キアシシギ」 蓮尾 純子



「普通の鳥」キアシシギ

待ちに待っていた声が聞かれました。プューイ、と澄み切ったひと声、8月14日未明。大好きなキアシシギです。美声が多いシギ・チドリ類の中でも、私にとっては断然トップ、暑さを一瞬忘れれます。

中型でこれといった特徴がないキアシシギ。飛んだ時も翼の白帯などはなく、一様な灰褐色。黄色い足もさほど目立たず、嘴もほどよい長さでまっすぐ。いかにもシギらしい、それも中庸に行くという姿もごひいきの理由。

他の旅鳥よりも一足早く、7月なかばころには日本に到着し、10月には姿を消すシギ。春の渡りの到着は遅めで4月下旬ごろ、5月下旬まで見られます。繁殖地はカムチャツカからシベリア北東部、越冬は東南アジアやオーストラリアとのこと。

ごくごく普通に見られた種類で、干潟に限らず田んぼや川岸、磯、港などいろいろな環境を利用します。今でも普通種のはずですが、著しい減少。もっともこれはシギ・チドリ類の大半も同様で、半世紀前の半数以下とか、種類によっては一桁ダウン、もっと減少というものも。

1966—1968年に新浜倶楽部がカウントされた当時には、1967年8月13日に1394羽、春の渡り時の5月19日には865羽が記録され、1969年8月—1970年8月まで行われた東京湾カウント（富津から多摩川河口まで。小櫃川河口は含まず）では、1970年5月24日に330羽、同年8月9日に1991羽が記録されています。

たしか1990年代はじめ、千葉中央博物館の桑原和之さんが、5月のベストシーズンに、千葉県全体をひとりで回ってシギの数を調べられたことがあります。この時、県全体でキアシシギが1000羽にならなかったと伺って、仰天しました。直近のシギチドリカウント（バードリサーチ）では、2023年5月14日の千葉県合計が192羽（全国で650羽）、2019年秋の東京湾合計が287羽（全国で3195羽）という結果でした。

限られた環境にしばられず、食べるものもかなり広範囲と思われるキアシシギのこの減少は何故？日本に限らず世界のシギ・チドリの大半の種も、同様に減少していると考えられています。第二次世界大戦後、生息地である干潟や湿地は急激に埋め立てられて行きました。繁殖の場としてのツンドラやタイガの環境はどうなのでしょう。東京湾での埋立は1960年代から1970年代がもっとも急激でしたが、1990年代にはほぼきりがつきました。しかしその後も広大な埋立地の市街化が進んでいます。

キアシシギはシギ・チドリ類としては比較的行動圏が狭く、シベリア北東部からアジア、オーストラリアの範囲で渡っています。それでも数千キロの距離を毎年自分の翼で飛ぶ鳥。こうしたシギたちの急激な減少、生息地破壊以外にも理由がありはしないか。事実を受け入れるだけでもこわいです。



写真左 増田直也 右 大塚豊

減少著しいシギ・チドリ類、その理由は？

私が鳥を見始めた1960年代の新浜（しんはま）では、数十羽どころか数百羽のキアシシギの群れは珍しくありませんでした。

表紙の言禁

老人は、午後になるといつも自転車に乗って現れ、この岸壁に座って「いつか魚は戻って来る」と呟きながら、遠く水平線に沈む陽を眺めて、その日を過ごしているのです。

なにせ定置網から溢れたマイワシがこの岸壁を埋め尽くすこともあったし、コアジがチョボンと飛び込むだけでパフィンのように口一杯のカタクチイワシをくわえて出てきたものでした。

そんなコアジも今は老いて頭は禿、眉は伸び、・・・・

岩本久則



パフィン

会員になって一緒にコアジサシを守りましょう！

NPO法人リトルターン・プロジェクトでは、随時会員を募集しています。わたしたちと一緒に絶滅の恐れのある野鳥“コアジサシ”を守りませんか？

◇入会届のダウンロード先◇

<https://littletern.net>

◇入会届の送付先◇

〒143-0015 東京都大田区大森西 5-10-22 増田方

NPO 法人リトルターン・プロジェクト宛

または、右記の問い合わせ先へご連絡ください。

◇発行：NPO法人リトルターン・プロジェクト

◇編集 増田 直也

◇表紙画 岩本 久則

☆問い合わせ先

NPO 法人リトルターン・プロジェクト

Tel : 090-1778-5917

E-mail : info@littletern.net

Website-URL <https://littletern.net>

ブログ更新中 <https://littletern.hatenablog.com/>



HPはこちらから